

魯迅と孫文

山 田 敬 三

(一) 魯迅と中華民国

魯迅の孫文に対する評価は高い。それは、彼が名実ともに実体の備わった中華民国統一の夢を晩年の孫文に託していたからであろう。だが不思議なことに、生前の孫文に対する魯迅の言及は、今日まったく見あたらない。孫文にふれた彼の最初の発言は、1925年3月21日、孫文の死（同12日）からおおよそ10日後に書かれた、『戦士とハエ』という、例の短い寓話ふうの文章である。

「ショーペンハウエルがこんなことをいった。人間の偉大さを量ろうとすれば、精神の大きさと体格の大きさとでは、その法則が完全に相反する。後者では距離が遠いほど小さくなるが、前者では逆に大きく見える、と。

近づけばそれだけ小さくなり、また欠点や傷もますます目につく、まさしくその故に、彼はわれわれと同じく、神でもなく、妖怪でもなく、異獣でもない。彼は相変らず人間である、それだけのことだ。だが、それだけであればこそ、彼は偉大な人間である。

戦士が戦死したとき、ハエどもがまっ先に発見したのは、彼の欠点と傷である。吸いついて、ブンブン鳴きながら、得意になって、死んだ英雄よりももっと英雄だと思いこんでいる。だが戦士はすでに戦死しているから、もはや彼らを追っばらおうとはしない。そこでハエどもはますますブンブン鳴き、自分では不朽の音だと思いつむ。彼らの完全さは、戦士をはるかに超えているからだ。

確かに、誰もハエどもの欠点と傷を発見した

ことはない。

だが、欠点のある戦士は、ひっきょう戦士であり、完全なハエもひっきょうハエにすぎぬ。

去れ、ハエども！ 羽根があって、ブンブンやれたところで、どうせ戦士は超えられないのだ。なんじら、この虫けらども！」

ここでは何ひとつ具体的な名称は使われていない。散文詩集『野草』の一節を想起させる簡潔ではぎれのよい文体は、それ自体で独立した1個のアフォリズムである。そのため、この文章は当時の文壇に対する魯迅の諷刺だという誤解も生んだようである⁽¹⁾。10日後の3月31日、魯迅は『これはこういう意味である』という短文を書いて、『京報副刊』誌上に登載した。その中で彼は、

「いわゆる戦士とは、中山先生、および民国元年のころ国に殉じながら、かえって奴僕どもから嘲笑され侮辱された烈士のことだ。ハエとは、むろん奴僕どものことである。」

と述べている。「戦士」とは要するに、中華民国建設のために生命を賭した革命家の謂であり、孫文（中山）は、いわば彼らの集合名詞である。そして「ハエ」は、その奴隷性の故に敵にこびる卑劣な奴僕（原語は「奴才」）に外ならない。魯迅は最大の讃辞を孫文に献げているのだ。

だがそうはいっても、孫文を軸として展開されてきた革命の過程に、魯迅はまったく無批判であったわけではない。上記の文から一週間あまり後、そのころはまだ彼の学生だった許広平あての書簡で、魯迅はこんなふうに彼の不満をしたためてい

る。

「大同の社会は、まだしばらくは来ないでしょうし、たとえ来ても、今日の中国のような民族では、きっと大同の門外に立たされるでしょう。ですから私は、何はともあれ改革をやるべきだと思います。しかし改革の早道は、やはり火と剣です。孫中山が一生革命に奔走しながら、それでも中国がこんなふうであるのは、彼が党の軍隊をもたず、そのため武力をもった他人に頼らざるを得なかったことが、やはり最大の原因です。この数年、彼らも自覚したようで、軍官学校を設立しましたが、すでに遅すぎたうらみがあります。」（魯迅、1925年4月8日）

魯迅は、孫文の輩下に軍隊のなかったことが、革命を不徹底にした「最大の原因」だという。それは中国革命の歴史を知る者にとって自明の事実、といえばそれまでであるが、しかし魯迅にとっては、何よりもまず自らの個人的な体験からわり出された痛切な実感である。

周知のように、孫文は1895年、広州で最初の挙兵に失敗した。爾来十数年、彼は世界各地をめぐってひたすら革命運動にとりくんだが、彼の試みた武装蜂起はすべて不首尾に終わっている。そんな時、孫文の依拠した軍事力は、主として、「会党」と呼ばれる民間の宗教的秘結社だった。

武昌での武装蜂起が成功したとき、孫文はアメリカのコロラド州デンヴァーに滞在していた。1911年11月末には、全国ですでに14の省が清朝から独立していたといわれるが、孫文はその報に接した後もすぐには帰国しなかった。11月2日にニューヨークを発ち、同月10日ロンドン着、21日にはパリへ入って列強各国と外交的な接衝を行ない、11月24日になってようやくマルセイユから帰国の船に乗る。途次シンガポール（12月15日）、香港（21日）に立ち寄って中国同盟会関係者と意見を

交換し、上海到着はその年も暮れようとする12月25日だった。こうして、同月29日に開かれた南京での17省代表会議で中華民国臨時大総統に選出されたが、彼はそのとき、会議の決定によって袁世凱に電報を打った⁽²⁾。清朝皇帝を退位させるためには、この北洋軍閥の軍事力を無視することができなかったからである。

そのころ、紹興にいた魯迅の耳に、このようなあわただしい革命後のプログラムがどの程度つたわっていたかは明らかでない。けれども、1912年元旦を期して出発した中華民国の建国と、その臨時政府を南京に置いて臨時大総統となった孫文の姿は、魯迅にとってもきわめて身ぢかな存在であったはずである。ただ、孫文がその地位にあったのは、わずかに一ヶ月たらずである。2月13日には早くも参議院に辞任を申請し、同月15日からは袁世凱が第二期臨時大総統に就任した。それは魯迅のいうように、孫文が「党の軍隊」をもたなかったせいである。

1912年4月、南京臨時政府は北方に勢力をもつ袁世凱の陰謀によって北京へ移転させられた。この時すでに政府教育部の役人であった魯迅も、それにとまって北京へ転住した。入京の第1日（5月5日）から残されている「魯迅日記」には、彼の教育行政によせる情熱が、政治の反動化とともに、無惨に冷却されていくありさまが、如実に書き記されている。同年7月には、魯迅を教育部に招聘した蔡元培が総長を辞任するところまで事態は悪化した。

袁世凱は専政支配をめざして、急速にその野心をあらわにした。臨時大総統就任の条件の一つだった臨時約法遵守の約束を完全に無視し、国会議員選挙で多数をしめた国民党の実力者宋教仁を上海駅頭に暗殺（1913年3月20日）、同年4月には、善後借款問題で彼に反対する胡漢民ら国民党の都督3名を罷免した。このような反動に対抗して「第二革命」を起こした孫文らも袁の軍事力の前に

2ヶ月で敗北した。日本へ亡命した孫文は、一年後に東京で中華革命党を結成して総理に就任したが、そのことは、この時点で中華民国が完全に実体を喪失していたことを意味しよう。

上述の期間は、それでもまだ名目的に中華民国は存続した。だがその後まもなく、名実ともにそれが姿をなくするような事態が二度までも到来した。その第1回は、いうまでもなく袁世凱による皇帝就任である。1916年元旦から年号を洪憲と改めて、袁は形式の上でも民国を完全に抹消しようとした。もっとも、袁のこの野望に対しては、そのおひざ元からも反対の声があがり、全国的にも帝制打倒運動が起こって、1916年6月、袁は失意のうちに病死した。この後は黎元洪が総統、北洋軍閥の段祺瑞が國務総理となって国会を再開し、南北間の妥協により北京政府のもとで中華民国を回復する。

民国消滅の第2回は、1917年、張勳による清朝廢帝溥儀のかつぎ出し運動（復辟）である。このとき、魯迅はついにたまりかねて辞表を教育部に提出した。南方では孫文が「護法」を主張して広東の独立を宣言した。ただしこの時、孫文の拠り所になっていたのは陸廷榮（広西）、唐繼堯（雲南）ら西南軍閥の軍事力だった。そのため、まもなく軍閥の反撓にあうと、孫文は広東を離れて上海へ脱出することになる。

その後の孫文は、1920年から1922年にかけて、軍閥陳炯明に擁立された形で広東に軍政府を樹立した。しかし北伐に反対する陳のクーデターによって、彼はまたしても上海へ逃れなければならなかった。当時、広州での陳の軍隊2万5千人に対して孫文指揮下の軍人はわずか5百人にすぎなかったといわれる⁽³⁾。自らの軍隊をもたない孫文は、こうして再三にわたって革命の挫折を体験する。

ところで一方、1921年7月には中国共産党が結成され、12月にはコミンテルン最初の在華代表マーリンが、桂林に孫文を訪れている。翌年8月に

はソ連全権大使ヨッフエの派遣した軍事顧問団が孫文と接触して極東問題に関する意見を交換する。両者はさまざまな曲折の後に、1923年1月、『孫文ヨッフエ宣言』を発して「中国の最も緊要なる問題は、民国統一の成功と国家の完全なる独立の獲得にある」ことを確認した。同年3月、孫文は雲南・広西の軍閥に依拠して広東に三たび軍政府を組織した。

1924年は広州で「中国国民党第一次全国代表大会」が開かれ（1月）、「連ソ・容共・労農援助」の三大政策が国民党右派の反対をおしきって確立され、第一次国共合作の実現した画期的な年である。しかし孫文を中心とする国家統一事業は、これによってようやくそのいとぐちを見出したにすぎない。同じ中華民国という国名のもとに、別な政権が一つ北方にあり、それ以外にも有力な軍閥がまだ各地に割拠していた。そして魯迅自身は、孫文の統治権が直接及ばない北洋軍閥政権の「中央」官吏だった。魯迅と孫文との関係を見る上で、これは見落とすことのできない大切な事実である。

なぜなら、辛亥革命直後から一貫して北方政府の教育部にいた魯迅の視界に、孫文が真に中華民国の統治者としてクローズアップされるのは、早くともこの時期、あるいは同年9月18日の『北伐宣言』以後だと考えられるからである。このことを積極的に証明する材料を魯迅の側から引き出すことはできないが、逆に魯迅がそれ以前に孫文を語らなかったことが、こうした推定の根拠となるのである。

入京直前、天津で肝臓ガンを悪化させた孫文は、翌1925年3月12日、北京でついに帰らぬ人となったが、この時になって初めて、魯迅は彼を心から追悼する。その後の二年間はタブーがとけたように、何度か孫文について言及する。その具体的な発言を、いま残された記録によって整理することにしよう。

(二) 魯迅と中山大学

『中山先生逝世後一周年』と題する魯迅の文章は、《国民新報》1926年3月12日付の「孫中山先生逝世周年紀念特刊」に発表された孫文への追悼文である。魯迅の孫文観を端的に表明した格調の高い文章なので、やや長くなるが、ここに全文を引用する。今のところ、まだ邦訳は見あたらないようである。

「中山先生逝世後何周年であろうとも、本来いかなる記念の文章も不必要である。これまでになかった、この中華民国が存在しさえすれば、それが彼の石碑、彼の記念である。

およそ民国の国民たることを自認するものにとって、民国創造の戦士にして第一人者である人を記憶しないものがあるだろうか？ だが、われわれ大多数の国民はことのほか沈静し、喜怒哀楽をまったく色に現わさず、それにもまして彼らの熱意と情熱とを吐露しない。それゆえになおさら記念せねばならぬのだ。それゆえにまた、なおさら当時の革命がどんなに苦難にみちたものだったかがわかり、それによってなおさら、この記念の意義は増大するのだ。

想えば去年の逝世後ほどなく、無責任なる言辭を弄する幾人かの論客さえ現われた。中華民国を憎悪したのか、いわゆる「賢者をとがめた」のか、自己の聡明さをひけらかしたのか、私にはわからない。だがいずれにしろ、中山先生の一生の歴史がある。社会での活動はそのまま革命だった。失敗してもまた革命にとりくんだ。中華民国成立の後も、満足せず、心ゆるめず、ひき続きなおも完全なる革命を求める活動に邁進した。臨終のきわになっても、彼はいった、「革命なおいまだ成功せず、同志なおすべからく努力せよ」と。

当時の新聞紙上のささやかな記事は、彼の生涯の革命事業と同じほど私を感動させた。それ

は西洋医がすでに手ばなしたとき、ある人が漢方薬を服するよう勧めたのだが、中山先生は同意せず、中国の薬にもむろん効果のあるものはあろうが、診断の知識が欠如している、診断できないで、どのように薬を使うのか？ 服むまでもない、というものだった。人間は死の危険に瀕した際、たいていは何でも試みしてみるものだ。だが、彼は自分の生命に対して、なおこのように明確な理知と確固とした意志を保持した。

彼は一個の全体、永遠の革命者である。何事であれその行為は、すべてが革命である。後の人間がいかにか彼をあげつらい、おとしめようとも、彼はついに全てが革命である。

なぜなのか？ トロツキーはかつて、革命的芸術とは何かを説き明かした。すなわち、主題に革命を語らずとも、革命によって生まれた新事物を内に蔵する意識を一貫させる者がそうである、さもなければ、たとえ革命を主題としても、それは革命的芸術ではない、と。中山先生逝世からすでに一年、「革命なおいまだ成功せず」を、こうした環境の中でわずかに一個の記念とする。だが、この記念が顕示するものは、やはり彼がついに永遠に新しい革命者をひきつけて前進すること、みんなして完全な革命を求める活動に努力邁進することである。三月十日朝。」

この当時、魯迅は役人生活のかたわら、北京大学、北京師範大学、北京女子師範大学で非常勤講師として中国小説史を講じていた。一見おちついた生活に見えて、実は魯迅の生涯でもかなり波乱に富んだ時期であった。いわゆる「女師大事件」によって、前年8月には教育部僉事を罷免され、平政院に提訴してようやくこの年一月に原職に復帰したばかりである。また、この追悼文を書いた直後に「三一八事件」が起こった。日本軍の内政干渉に端を発したこの事件は、中国人の死者47名、

負傷者二百余名を出し、そのうえ、事件とは直接なんのかかわりもない魯迅にまで逮捕状の出そうな形勢になった。上記追悼文がいうように、段祺瑞臨時執政下の北京は、まさしく「こうした環境の中」にあったのである。

この事件から間もなく、女師大より厦門大学へ移った林語堂の招きで、魯迅も同年8月26日には北京を離れて厦門へ向った。「女師大事件」を通して急速に親しくなった許広平が、列車で上海まで同行した。彼女は郷里である広州の広東女子師範学校へ勤務することになっていた。そして上海で別れてからの二人は、すでに師弟の間がらをこえる感情をもった手紙の交換を開始する。『両地書』第2集に相当する部分である。この書簡集には、おおむね順調に進行している「北伐」への期待がしばしば語られている。辛亥革命記念日である双十節（10月10日）への対応は、数年前の短篇小説『髪の話』の中に見られたような悲観的なものではない。

「今日は双十節ですが、私は非常に嬉しかった。本校ではまず国旗掲揚式、万歳三唱、それから演説、運動、爆竹でした。北京の間は双十節がいやだったらしく、死んだようにひっそりしていたが、ここはいかにも双十節です。私は北京では年越しの爆竹を聞くのがいやで、爆竹には反感をもっていたけれど、今度ばかりはよい音でした。……（中略）……厦門の市街は今日もにぎやかだったそうです。商店や民家も自分から旗を掲げ、赤い布を飾って祝ったそうです。北京みたいに、警官にいわれてから、やっと汚ない五色旗を掲げるのとはまるで違います。ここの人民の思想は、私の見るところ、たしかに「国民党的」で、決して古くさくはありません。」（1926年10月10日）

「当地の今日の新聞にはよいニュースが出てい

ます。むろん、確かかどうかはわからないが、一、武昌はすでに攻略。二、九江はすでに占領。三、陳儀（孫の師団長）等は和平主張を打電。四、樊鍾秀はすでに開封へ入り、呉佩孚は保定（一説では鄭州）へ逃走。要するに、たとえ割引くにしろ、形勢のいいことはたしかです。」（同15日）

これらに対応する広東からの許広平の手紙にも明るさが見られる。孫文なき後の第一次国共合作の実績は、少なくともこの時点では魯迅にそれ相当の期待を抱かせるものだった。許広平は左派に属する国民党党员である。孫文路線の継承のある限り、魯迅もその立場を基本的に肯定していたといえよう。

厦門大学の雰囲気は、しかし魯迅にとって決して快よいものではなかった。着任後二ヶ月もしないうちに、中山大学から招聘され、翌年1月には早くも広州へ向った。厦門滞在の期間は5ヶ月にも満たない。

魯迅の最後の職場となった中山大学の前身は、1924年6月に、国立広東高等師範等三つの学校を併合して設立した広東大学である（このとき同時に、黄埔軍官学校も開設された）。そして魯迅が厦門大学にいや気のさしていた1926年10月ごろ、広東大学では、孫文を記念して校名を中山大学と改め、戴季陶を委員長とする改組委員会を設置して、新しい教授陣を整えようとしていた⁽⁴⁾。準備のため一学期間休校して、翌1927年3月に中山大学は開校された。文科主任だった郭沫若は、北伐戦争に参加するため、すでに広州を離れていた。愛する許広平がそこにいることをも含めて、魯迅の中山大学赴任は、こうした幾つかの要素が組み合わさって実現した記念すべき事実である。

文学系主任兼教務主任としての魯迅は、この大学で孫文を記念する一編の文章と講演記録を残している。いずれも1927年3月、広州で出版された

《国立中山大学開学紀念冊》に収録されたものといわれるが、筆者は原本によって確認していない。ただ、前者は同誌の「論述」欄に周樹人名義で発表された自筆原稿らしく、新旧いずれの「魯迅全集」にも、『中山大学開学致語』と題して収録されている⁽⁵⁾。

この文章は「中山先生が生涯を国民革命に尽力した結果、後に遺された最大の記念、それは中華民国である。」という言葉で始まり、中山大学は「孫総理の革命的精神を貫徹する」目的で設立された大学であるが、しかしそれは今や「後方」になった、と説く。他方、孫文の方は「常に革命の前線」にあった人である。ここは、「平静な空気の中」にあって、もはや「反抗」も「革命」もなくなっているもの、やはり「革命的精神の充満」している所としなければならない、という。もしそうでなければ、「革命の後方は怠け者が安楽をむさぼる所になってしまう」からである。結末の一句は、「私は中山大学人が坐して仕事についていても、永遠に前線を忘れぬことだけを、まず希望する」という、いかにも魯迅らしい言葉でしめくられている。

いっぽう、同じ「紀念冊」誌上に掲載された『本校教務主任周樹人（魯迅）演説辞』の方は、一部の句読点および字句を修正して、同年4月1日付発行の《広東青年》第三期に『読書と革命』と題して再録された。「魯迅日記」1927年3月1日の項で「午中山大学行開学典礼、演説一分鐘、下午照相。」とある記載内容に対応する記事である。これも筆者は原本を確認していないが、そこには「由林霖同志筆記、魯迅先生又自校閲過。」という『編者附識』がついているという⁽⁶⁾。その内容は、その後まもなく出版された鍾敬文編『魯迅在広東』（1927年7月、北新書局）所収の『読書と革命』とまったく同文である。従って、もしこの『編者附識』に問題がなければ、この記録は当然「魯迅全集」に収録されてよいはずである。だが

1956年版、1981年版ともに、全集編者は『読書と革命』に市民権を与えなかった。なぜか？

魯迅は鍾敬文編『魯迅在広東』に不満だった。李小峰が上海北新書局からそれを出したいといってきたときに三つの条件をつけたが、その第一に「書中の私の演説、文章等をすべて削除すること」を掲げている（1927年9月3日『通信』）。また1934年5月22日付の楊霽雲あて書簡でも「《魯迅在広東》中の講演、則記得壊、大抵和原意很不同、我也未加以訂正、希 先生都不要宅。」と記している。「魯迅全集」が『読書と革命』を収録しなかったのはこれらの手紙のせいだと考えられる。だが、『編者附識』の「魯迅先生又自校閲過。」という記載と、魯迅書簡の「我也未加以訂正」という書き方とは明らかに矛盾する。《広東青年》の編集者が、魯迅の同意なしに「自校閲過」と記したのか、あるいは魯迅が後に「自ら校閲した」事実を忘れてしまったのか。

そこでこのくいちがいを問題にしながら、魯迅が「加筆したことがない」といっているのは、《魯迅在広東》に収められた『魯迅先生的演説（林霖記）』についての記述であって、『読書と革命』はそれにあてはまらない、という中山大学中文系現代文学組の推定（《中山大学学報》哲学社会科学版1977年第2期）も成立しないではない。しかし魯迅自身が「すべて」削除するよう希望しているという事実がある以上、「自ら校閲した」かどうかとは無関係に、「魯迅全集」へは採録しない、というのが全集編者の態度となったようである。たしかに魯迅の意志を最優先すれば、こうした方針もあながち誤っているとはいえないであろう。だが、やはり一点の疑問が残る以上、「全集」としては少なくとも、これを参考資料として注釈つきで収録してもよかったのではないかな。なぜなら、『読書と革命』には、次に引くような、たしかに魯迅の発言だったと考えられる特色をもった文明観が語られていて、これらは当時の魯迅を知

る上でも、きわめて貴重な資料であるからだ。

「改革せねばならない所は多い。いまこの地の一切はいぜんとして古い、人々の思想もやはり古い、これらはいずれもまだ改革に着手されていない。軍閥に対しては、すでに黄埔軍官学校の同学が攻撃を加え、打倒したのを、私たちは見ている。だが一切の古い制度、宗法社会の古い習慣、封建社会の古い思想に対しては、まだそれらに開戦した人はいない。

中山大学の青年学生は勉学から得たものを武器として、それらに進攻しなければならない——これは中大青年の責任である。私は諸君が一致してこの責任を担うよう希望する。」

(三) 魯迅と孫文

すでに見てきたように、魯迅は孫文の指導下に推し進められた北伐、あるいは孫文の遺志をついで実現されつつあった中華民国統一事業を、いったんは打ちくだかれた辛亥革命の夢を回復するものとして、心底から支持し、それに大きな期待をかけていた。この「国内革命戦争」指導者としての孫文には、ほとんど手ばなしの礼讃、評価を下していた、といってもいいすぎではないだろう。ただしそれは「蓋棺論定」の言葉どおり、孫文の故人となった後に発せられた魯迅の追悼の辞であった。

ところで開学直後の中山大学で公表された魯迅の文章および演説記録は、時期的にはちょうど孫文逝去二周年に相当するところのものである。そしてこのころから、「革命策源地」としての広州の政情は、国共合作を推進しようとする国民党左派および中国共産党にとって急速に悪化する。その発端はむろん1927年4月12日に、蔣介石の手で発動された上海の反共クーデター「四一二」事変である。魯迅の住む広州へは4月15日に波及した。この日、中山大学は武装警官によって包囲され、

40数名の学生が学内で逮捕された。その中には中共粵区区委員会と魯迅との接触を斡旋して、魯迅の所へしばしば訪れた中大の学生党员畢磊もいた。彼はまもなく、官憲の手で虐殺されてしまった。

こうした状況は、もちろんこの日、突然やってきたわけではない。「四一五」の前に魯迅の書いた文章や講演記録には、革命策源地広州の実態が必ずしもその言葉にみあったものでないことを憂えたものがいくつかある。事変のちょうど一週間前、黄埔軍官学校で行なった『革命時代の文学』と題する有名な講演もその一つである。

「広東の新聞に載る文学は、みな古いもので、新しいものは少ない。やはり広東の社会が革命の影響を受けていないことを証明できます。新しいものに対する謳歌もなければ、古いものに対する輓歌もなく、広東は依然として10年前の広東です。それだけではなく、苦しみを訴えないし、不平も鳴らさない。労働組合のデモだけは見られますが、これは政府が許可したもので、圧迫に反抗するものではなく、上からの命令による革命にすぎないのです。中国の社会は改革されないので、懐旧の歌もなければ、斬新な行進曲もありません。」（1927年4月8日）

4月15日午後、中山大学では各系主任緊急会議が招集された。魯迅はここで、逮捕された学生たちの救済活動を主張したが、国民党右派に属する副校長朱家驊らの反対にあって受け容れられなかった。その後まもなく、彼は許寿裳（歴史系教授）とともに辞表を大学当局へつきつけた。許の辞表はただちに受理されたが、魯迅のそれは、紛争の発生を恐れた当局が認めず、何度かのやりとりがあった末、ようやく6月6日になってから正式に認可された。

この年の7月、国民党政府広州市教育局は「広州夏期学術演講会」を開催し、魯迅をその講師に

招聘した。魯迅はこの場で『魏晋の気風および文章と茶および酒との関係』という演題の下、彼の古典文学に対するユニークな見解を披露しながら、実は偽の三民主義論者（国民党右派）に対する諷刺、権力者批判を行なっていた。たとえば、孫文にふれた次のような一節にもそれを見ることができるだろう。

「いま、わかりやすい比喻を申しましょう。たとえば、ある軍閥が北方にいますとします——広東にいる人がいう北方と、私がいつもいう北方とは、範圍が少しちがいます。私は山東、山西、直隸、河南などをいつも北方といいます——その軍閥は、これまで民党を圧迫してたくせに、北伐軍の勢力が大きくなってくると、急いで青天白日旗を掲げ、自分はすでに三民主義を信奉しているんだ、総理の信徒なんだ、というのです。そればかりか、さらに総理の記念週間を催すのです。こんなとき、真の三民主義の信徒は、参加するでしょうか、しないでしょうか？ 参加しなければ、そいつは、おまえは三民主義の反対者だといって、罪におとし入れ、殺してしまうでしょう。しかし彼の勢力下にいるのですから、ほかに手だてはありません。真の総理の信徒は、三民主義を口にしなくなるか、あるいは、他人がもっともらしく口にすることを耳にすると、眉をひそめて、まるで三民主義に反対するかなのようなそぶりに出るでしょう。」（1927年7月）

蒋介石による反共クーデターは各地に波及し、4月18日には国共合作を支持する武漢政府に対抗して南京政府が組織された。そして7月には武漢政府も反共をうち出し、9月には双方が合体する。だが、孫文の三民主義は彼らにとってのもいせんとし錦の御旗である。そうであってみれば、孫文も三民主義も、いきおい形骸化せざるを得ない。

同年12月、国民党政府はソ連との国交を断絶、「連ソ・容共・労農援助」という孫文以来の三大政策は完全に破棄された。こうして、今や孫文の亡霊だけが一人歩きを始めることになる。

翌1928年、南京では国民党による中山陵建設工事が大々的に行なわれていた。それをひややかに眺める民衆の目を、魯迅は『太平のまじない歌』という短文の中で巧みに描出している⁽⁷⁾。「おまえの造る中山陵、おれと関係あるものか。魂よんでも行きはせぬ、も一度よぶならおまえ行け。」——こんな民間の「まじない歌」を引きつつ、彼はこの現実をあえて直視しようとはしない当時の「革命家」「革命政府」および「革命文学者」に鋭い諷刺をあびせていた。

もっとも、ここでいう「革命」には、かつて国民党および共産党にとって共通の目標であった「国内革命戦争」というときの「革命」と、当時すでに「革命文学」を標榜して、魯迅らへの攻撃を開始していたプロレタリア文学者たちの「革命」とが微妙にオーバーラップしている。「革命政府」というときには前者を意味するが、この時点では、それは国民党による反共政権を指すことになる。これに対して「革命文学者」というときのそれは、明らかに後者のプロレタリア文学者を意味する。同じ用語ではあっても、その具体的な内容は、必ずしも時代によって截然と区分できるわけではない。ただしそれらは、魯迅に特有の用法というよりも、同時代の当事者には自然に読み分けることのできる言葉であった。また「革命」という単語によって言表された内容が、このように重層的であることによって、魯迅の用法はいっそうアイロニーとしての効果を高めていたといえよう。

『太平のまじない歌』を最後として、魯迅はその後、死にいたるまで、ついに公的な場で孫文について語ることはなかった。それはあたかも、軍閥が「総理の信徒」を自称するとき、「本当の総理の信徒」が三民主義をいわなくなるという、「広

州夏期学術演講会」での彼自身の発言を裏づけるような事実であった。ただ、晩年に一度だけ、楊霽雲にあてた私信の中で、わずかに最後の孫文観を一言のべたとどまる。

「中山は生涯を革命に奔走しました。外国や中国の開港地を往来するだけで、危険な場所へは足を入れませんでしたが、しかしけっきょくは生涯を革命に奔走しました。死ぬときまでずっとそうでした。中国ではやはりりっぱな人物に入ります。」（1935年2月24日）

中山大学在職中の、ほとんど手ばなしの礼讃ともいえるような孫文評価に比べれば、魯迅のこの言葉はかなりつき放した客観性を帯びている。晩年の魯迅は、三民主義の継承者を自称する国民党とはむろん対立関係にあり、その期待はむしろ延安の革命根拠地にむけられていた。けれども、だからといって、三民主義によって中華民国の実質を作ろうとした孫文にまで批判の刃をさしむけたわけではない。魯迅にとって、孫文は革命に生涯を献身した、「中国ではやはりりっぱな人物」とみなし得る人であったのだ。

すでに見てきたように、魯迅の孫文に対する言及は決して多いとはいえない。孫文の生前、孫文にふれた言葉はなく、孫文の死後もせいぜい2、3年で、それらはぶつり途絶した。直接的な評価ということになれば、それは逝去直後の『戦士とハエ』から、逝世二周年記念にいたるちょうど2年間に集中して公表されたのみである。ただ、この2年間の孫文評価には、北伐戦争によせる魯迅の熱い期待がそのままそこに充填されている。辛亥革命前夜に構想した国民性改造のプログラムを、彼は改めてこの事業の中に描きなおす意欲をとりもどしたかのようである。

だが、孫文逝去二周年を、まるで待ちかまえていたかのようにして発動された政変は、このとき

ようやく取りもどした魯迅の意欲に決定的な打撃を与えた。クーデター以後の1年間、魯迅は孫文および三民主義それ自体については一切語ることなく、ただそれらを借りて、偽瞞的三民主義者を痛烈に揶揄するだけであった。この後の魯迅は、もはや再び三民主義について語ることはなかった。ただ、わずかに孫文を、歴史的に評価すべき人物として冷静に位置づけたのみである。

魯迅の孫文に対する評価は決して低いものではない。いや、同時代の政治家の誰に対するものよりもそれは高いといってよい。だが、もはや孫文によって中華民国の将来を構想する必要のない地点に、晩年の魯迅は立っていた、ということであろう。

注 釈

- (1) 魯迅『這是這麼一個意思』（1925年3月31日）
- (2) 孫文の行程については『孫中山年譜』（中華書局、1980年7月）によった。
- (3) 宋慶齡『広州脱險』（人民出版社、1966年版《宋慶齡選集》第3ページ）、ただし上記年譜による。
- (4) 吳相湘『国立中山大学現況（影印本）前言』、中山大学『中山大学招生簡介1979』等。また、『兩地書』第二集に収められた許広平の書信にもこの間の事情が記されている。
- (5) ただし1959年刊『集外集拾遺』で「三月一日在広州中山大学講」とあるのは誤りである。次に引く「演説辞」との混同があったようだ。
- (6) 中山大学中文系現代文学組『關於《読書与革命》の一点説明』（《中山大学学報》哲学、社会科学版1977年第2期）、文叙編『魯迅全集補遺三編』「編後説明」（1978年7月、天地圖書有限公司）。後者は前者によっていると思われるが、ともに魯迅の当日の演説を「十分鐘」と誤る。
- (7) 魯迅『太平歌訣』（1928年4月10日、『三閑集』所収）。

（やまだ・けいぞう 神戸大学助教授）